

令和2年10月

語り部：須賀 一成

今から75年前の話になりますが、はっきりと覚えていて絶対に忘れられないことがあります。私の隣の同学年の友達のお父さんは、戦争が終わって数カ月して帰ってきました。私の父も、当然帰ってくるものと思い、門の戸が開くのを心待ちにしていました。ところがいくら待っても帰ってこず、次第に心細くなってきました。1年くらい経ったある日、父が亡くなったとの知らせを祖母が受け取ると、家の中に走りこんで、縁側で大きな声で泣き叫びました。それから何日も何日も家族みんなが悲しみました。このとき私の見た祖母の悲しむ様子は、75年経った今でも思い出すことができ、私も悲しくてやりきれません。この時代の青年は、誰にでも死がすぐそばにありました。負けることがわかっている戦争、死ぬことがわかっている戦争に軍人をなぜ送り出したのか。そのような戦争をなぜ続けたのか。戦争を続けたことに対し、怒りというか諦めというか、何もできない個人の虚しさ、何か大きな物に押しつぶされ、反抗できない恐ろしさを感じます。戦争が始まってしまうと、途中で止める事は不可能に近いです。戦争では、たくさんの方が死に、たくさんの方が悲しみます。そして、たくさんの方が思い出も消えてしまいます。我々みんなが、悲しみを背負うことになります。

戦争で多くの若者はお国のため、家族のためにと尊い命を亡くし、それら多くの尊い犠牲によって、新しい日本の礎が築かれました。そして、その子供である私たちは、一生懸命働いて、奇跡と言われる経済復興を成し遂げ、今日の平和な日本を作り上げました。これからの日本は、あなたたちが作り上げていきます。平和はじっとしていても手に入りません。みなさんたちで作り上げるものです。どうしたらできるか考えてください。

私の家族の話をして。私の父は、自宅で歯科医を開業していましたが、昭和18年3月4日に出征し、香川県の善通寺に入隊しました。行き先も告げられず船に詰め込まれ、着いた先はパプアニューギニアでした。そして、昭和19年4月16日に33才で亡くなりました。出兵してから1年1カ月で亡くなり、何の戦いに行ったのか、死ぬるために行っただけのような気がします。私は、1才7カ月くらいのときに父と別れ、父の姿は写真で見ただけで、残念なことに手や身体の温もりを思い出せません。

私の家の庭に掘った防空壕について、祖母がこんな言葉を残してくれています。「あの長い戦争の物がないなか、良く成長したものです。そう、空襲と言うて、空から飛行機が飛ぶ音がすると、どこで遊びよっても、防空壕の自分の座るところへちゃんと帰り、座りよったのが、未だに目に焼きつき、残っています。よう大学まで行けて卒業できたものですね。祖母も嬉しくてたまりません。」これは、祖母が残してくれた最後の手紙です。今読んでも悲しくて苦しいです。

松山大空襲では、私の家は城山周辺ではなかったもので、消失しませんでした。食べ物も農家でしたので、麦や芋の混ざったご飯は食べていましたが、不自由な思い出はあまり残って

いません。学校に通いだしてからは、給食に出てくる週に一度のぜんざいが一番の楽しみで、それを目当てに朝から出席する人もいました。

松山市が空襲を受け、城山周辺が燃えてしまったという話を聞き、空襲の翌朝（7月27日）に松山城方面を眺めると煙がかすかに見えました。その際、四角い折り紙程度の大きさの銀色の紙を5つぐらいに切った幅の紙が落ちていたのを拾いました。また、B5ぐらいの大きさの紙に何か文字が書かれたもの（宣伝ビラ）を、友達が拾ったと言って、見た記憶があります。

次に、松山大空襲の被害状況についてです。昭和20年7月26日午後11時頃から約2時間、B29爆撃機が焼夷弾を投下しました。焼夷弾は米軍が日本の木造家屋を焼くために開発した爆弾です。松山市には主に2種類の焼夷弾が、城山を中心に清水町、大街道、湊町、日銀、県庁周辺に投下されました。この結果松山市の中心部が焼け野原になりました。被害状況は死者数251名、行方不明者数8名、罹災戸数14,300戸でした。

最後に、誰もが平和で、誰もが安心な社会を、これからの日本を築いていく若いみなさん方一人一人が、たくさん勉強して、①何が正しいことかを考えられる知識、②その正しいことを行うにはどうすればいいかと考える能力、③自分のこととして行える実行力、④そのような広い知識と判断力、実行力を身に付け、⑤一人になっても正しいことを実行する勇気を持った若者になって、⑥日本をそして、世界を平和な世の中に作り上げてください。